

回転二球間流れの摩擦抵抗の一考察

中 林 功 一

生産機械工学科

(1975年 8月 25日受理)

A Note for Frictional Resistance of the Flow between Two Concentric Spheres, One of which Rotates.

Kouichi NAKABAYASHI

Department of Mechanical Engineering

(Received August 25, 1975)

Frictional resistance of the flow between two concentric spheres, the outer one rotating and the inner one stationary, is theoretically considered in the case where the clearance between the two spheres is not so small. The results obtained are as follows. Coefficient of frictional moment C_M is proportional to $Re^{-1/2}$ and $(R_2/R_1)^{3/2}$ in the laminar flow. In the turbulent flow C_M is proportional to $Re^{-1/5}$ and $(R_2/R_1)^{9/5}$, where Re is Reynolds number, and R_1 and R_2 are the outer radius of the inner sphere and the inner one of the outer sphere, respectively.

1. はじめに

同心状態に置かれた大小2個の球が形成する球かく状すきまにおいて、一方の球が軸のまわりに回転し、他方が静止している場合の流れの問題は流体力学上興味のある問題である。また工業的にも応用される所が多い。外球が回転し、内球が静止している場合の摩擦抵抗の実験¹⁾によれば、すきま比 β が極めて小さい場合を除いて、層流の摩擦モーメント係数 C_M がレイノルズ数 R_e の増加に対し、 R_e の約1/2乗に反比例して減少する。また乱流では R_e の1/5乗に反比例することが知られた。しかし、すきま比 β と摩擦モーメント係数 C_M との関係については定量的に明確な形で結論が得られていない。本報では上記の場合に対し、実験で得た C_M と R_e の関係を理論的説明を与えると同時に、 C_M と β の関係を理論的に導出する。

おもな記号

C_M : 摩擦モーメント係数 (摩擦抵抗係数) $=M/(\rho R_1^5 \omega^2)$

K : 係数

M : 摩擦モーメント

P : 圧力

R_1, R_2 : 内球と外球半径

R_e : レイノルズ数 $=R_1^2 \omega / \nu$

S : すきま $=R_2 - R_1$

U : ポテンシャル・コアの φ 方向速度

y : 外球壁から内球中心に向う座標 (Fig. 2)

z : 内球壁から垂直、外向きの座標 (Fig. 2)

(r, θ, φ) : 球座標 (Fig. 1)

(u, v, w) : 座標系 (r, θ, φ) に対する速度成分

β : すきま比 $=S/R_1$

δ, ϵ : 外球内面および内球外面に沿う境界層厚さ (Fig. 2)

η : 無次元座標 $=y/\delta$ または z/ϵ

μ : 粘性係数

ν : 動粘性係数

ρ : 密度

τ : せん断応力

ω : 外球回転の角速度

添字 i : 内球

0: 外球

θ : θ 方向

φ : φ 方向

2. 運動量積分方程式

レイノルズ数 R_e のごく小さい、いわゆるクリーピング流動では摩擦抵抗モーメント M が比較的簡単な計算から $M=8\pi\mu\omega R_1^3 R_2^3 / (R_2^3 - R_1^3)$ と求めうることは周知のとおりである。これも摩擦モーメント係数 C_M で表わせば

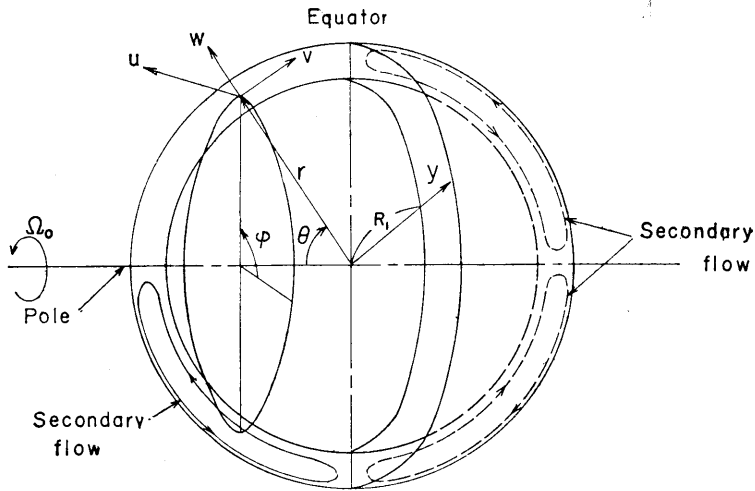


Fig. 1 Spherical coordinate

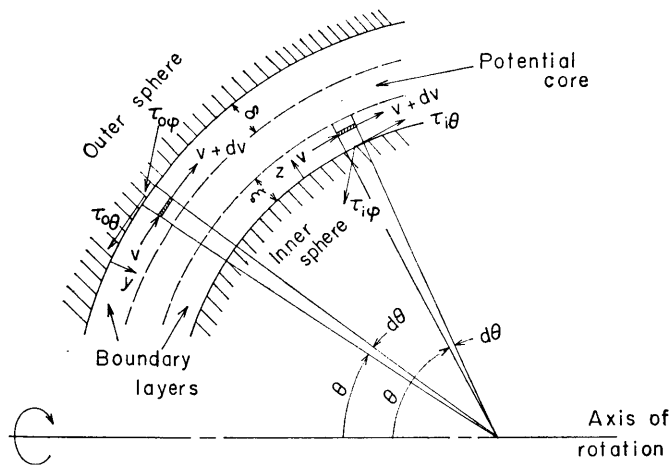


Fig. 2 Schematic picture of boundary layers produced in the spacing between two concentric spheres.

$$C_M = \frac{8\pi}{3} \frac{(1+\beta)^3}{\beta(1+\beta + \frac{1}{3}\beta^2)R_s}$$

となる。上式の適用範囲は理論的予測から $R_s \ll \beta^{-2}$ で与えられるが、実験によれば上式がこの適用限界の約10倍の R_s まで実験値と一致する。しかし、この限界値以上のレイノルズ数においては流れが層流であっても上式は適用できない。その理由はFig. 1に示すような二次流れの発生によって、 ϕ 方向速度成分 u が著しい影響を受けるからである。実験によればたとえば、すきま比 β が 0.06 のとき $R_s = 10^4 \sim 10^5$ において C_M が R_s の約 1/2 乗に反比例して与えられる。さらに R_s が 増大すれば流れが乱流となる

がその場合は C_M が R_s の 1/5 乗に反比例して減少する。このような高レイノルズ数流れについて以下の仮定を用いて計算しよう。

今、すきま流れをFig. 2に示すように外球内壁および内球壁に沿う境界層流れと、両者の中間のポテンシャル・コア部に分離して考えよう。境界層内の速度分布形が θ 方向に相似性を保ち、速度成分 u に対してはFig. 3-a、また速度成分 v に対してはFig. 3-bのように与えられるものとする。また圧力 P は θ 方向にのみ変化すると仮定すれば運動量積分方程式は以下のように与えられる。

外球表面に作用するせん断応力の θ 方向成分 $\tau_{\theta\theta}$ は外球

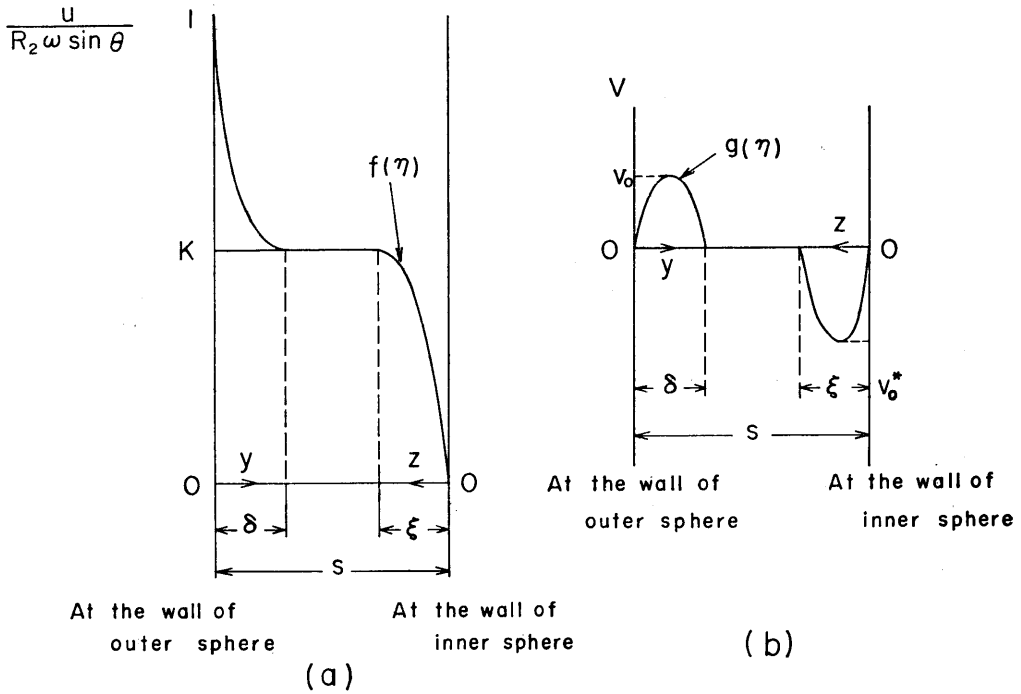


Fig. 3 Assumption of velocity distribution, u and v .

側の境界層 δ における θ 方向の運動量の関係から

$$\tau_{\theta\theta} = -\frac{\rho}{R_2^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \left[\sin \theta \int_0^\delta (R_2 - y) v^2 dy \right] + \frac{\rho \cot \theta}{R_2^2} \int_0^\delta u^2 (R_2 - y) dy - \frac{\delta}{R_2} \frac{dP}{d\theta} \quad \dots\dots\dots(1)$$

同じく φ 方向成分 $\tau_{\theta\varphi}$ は φ 方向の角運動量の関係からつぎのように求められる。

$$\tau_{\theta\varphi} = \frac{\rho}{R_2^2 \sin^2 \theta} \left[\frac{\partial}{\partial \theta} \left(\int_0^\delta r^2 u v \sin^2 \theta dy \right) + U (R_2 - \delta) \sin \theta \frac{\partial}{\partial \theta} \int_0^\delta r v \sin \theta dy \right] \quad \dots\dots\dots(2)$$

ただし $r = R_2 - y$.

外球に作用する摩擦モーメント M_o は

$$M_o = 4\pi R_2^3 \int_0^{\frac{\pi}{2}} \tau_{\theta\varphi} \sin^2 \theta d\theta \quad \dots\dots\dots(3)$$

一方、内球表面のせん断応力の θ 方向成分 $\tau_{i\theta}$ は

$$\tau_{i\theta} = -\frac{\rho}{R_1^2 \sin^2 \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\sin \theta \int_0^\epsilon (R_1 + z) v^2 dz \right) + \frac{\rho \cot \theta}{R_1^2} \int_0^\epsilon u^2 r dz - \frac{\epsilon}{R_1} \frac{dP}{d\theta} \quad \dots\dots\dots(4)$$

同じく φ 方向成分 $\tau_{i\varphi}$ は次式で与えられる。

$$\tau_{i\varphi} = \frac{\rho}{R_1^2 \sin^2 \theta} \left[\frac{\partial}{\partial \theta} \left(\sin^2 \theta \int_0^\epsilon r^2 u v dz \right) + U (R_1 + \epsilon) \sin \theta \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\sin \theta \int_0^\epsilon r v dz \right) \right] \quad \dots\dots\dots(5)$$

ただし $r = R_1 + z$. ゆえに内球に作用する摩擦モーメント

M_i はつぎのように求められる。

$$M_i = -4\pi R_1^3 \int_0^{\frac{\pi}{2}} \tau_{i\varphi} \sin^2 \theta d\theta \quad \dots\dots\dots(6)$$

ここで明らかに $M_o = M_i$ でなければならない。

ポテンシャル・コアにおいては $u = U, v = w = 0$ と仮定できるので球座標を用いたN.S.運動方程式からPに対しつぎの関係式がえられる。

$$U^2 \cot \theta = \frac{1}{\rho} \cdot \frac{\partial P}{\partial \theta} \quad \dots\dots\dots(7)$$

ただし上式のUは $U = K\omega R_2 \sin \theta$ で与えられるものとする。

以上の式(1)~(7)を用いて次節のように摩擦モーメント $M_o = M_i$ を求めることができる。

3. 層流の摩擦モーメント係数

内球側と外球側の境界層内の速度分布は相似であり、 u, v はそれぞれ次式で与えられるものと仮定する (Fig. 3).

外球側境界層 ($0 < y < \delta$) では

$$\left. \begin{aligned} u &= K\omega R_2 \sin \theta \cdot f(\eta) \\ v &= v_o g(\eta) \end{aligned} \right\} \quad \dots\dots\dots(8-a)$$

内球側境界層 ($0 < z < \epsilon$) では

$$\left. \begin{aligned} u &= R_2 \omega \sin \theta \{1 - (1-K)f(\eta)\} \\ v &= -v_o^* g(\eta) \end{aligned} \right\} \quad \dots\dots\dots(8-b)$$

ただし $f(\eta), g(\eta)$ は η のみの関数である。

ゆえに内、外球壁に作用するせん断応力の θ, φ 方向成

分は次式で与えられる。

$$\left. \begin{aligned} \tau_{o\theta} &= \mu \frac{dv}{dy} \Big|_{y=0} = -\frac{\mu v_o}{\delta} g'(0) \\ \tau_{o\varphi} &= -\mu \frac{\partial u}{\partial y} \Big|_{y=0} = -\frac{\mu}{\delta} R_2 \sin\theta \cdot \omega (K-1) f'(0) \\ \tau_{i\theta} &= \mu \frac{\partial v}{\partial z} \Big|_{z=0} = -\frac{\mu v_o^*}{\varepsilon} g'(0) \\ \tau_{i\varphi} &= -\mu \frac{\partial u}{\partial z} \Big|_{z=0} = -\frac{\mu}{\varepsilon} K \omega R_2 \sin\theta \cdot f'(0) \end{aligned} \right\} \dots(9)$$

ここで $f(\eta)$, $g(\eta)$ を Daily & Nece²⁾ が円板摩擦の計算に用いたと同様、境界条件を満足するように仮定すれば次式がえられる。

$$\left. \begin{aligned} f(\eta) &= 2\eta - \eta^2 \\ g(\eta) &= (2\eta - \eta^2)(1 - \eta)^2 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots(10)$$

式(7), (8-a), (9)を式(1), (2)に代入し, v_o を消去すれば, 外球側境界層においてつぎの微分方程式が得られる。

$$\sin\theta \frac{dX}{d\theta} + A_1 X \cos\theta = A_2 \cos\theta \left\{ \sin\theta \frac{dX}{d\theta} + A_3 X \cos\theta \right\}^2 X^3 \dots\dots\dots(11)$$

ここで

$$\begin{aligned} X &= R_e^{1/2} \delta / R_1 \\ A_1 &= \frac{31 + 53K}{13 + 29K} \\ A_2 &= \frac{(3 + 4K - 7K^2)(3 + 11K)^2}{1050(1 - K)(13 + 29K)} \\ A_3 &= \frac{9 + 19K}{3 + 11K} \end{aligned}$$

内球側境界層については式(7), (8-a), (9)を式(4), (5)に代入して v_o^* を消去すればつぎの微分方程式が得られる。

$$\sin\theta \frac{dY}{d\theta} + B_1 Y \cos\theta = B_2 Y^3 \cos\theta \left\{ \sin\theta \frac{dY}{d\theta} + B_3 Y \cos\theta \right\}^2 \dots\dots\dots(12)$$

ここで $B_1 = 53/29$, $B_2 = 121/2250$, $B_3 = 19/11$,

$$Y = \frac{\varepsilon}{R_1} K^{1/2} \left(\frac{R_2}{R_1} \right)^{1/2} R_i^{1/2} \text{ である。}$$

また式(3)および(6)で与えられる M_o , M_i において, $M_o = M_i$ の関係が成立しなければならぬから, つぎの関係式が導出される。

$$\frac{1-K}{K^{3/2}} \left(\frac{R_2}{R_1} \right)^{5/2} = \frac{\int_0^{\pi/2} \frac{\sin^3\theta}{Y} d\theta}{\int_0^{\pi/2} \frac{\sin^3\theta}{X} d\theta} \dots\dots\dots(13)$$

いま簡単のため式(11), (12)における微分項 $dX/d\theta$, $dY/d\theta$ を無視して計算すれば

$$X = \left(\frac{A_1}{A_2 A_3^2} \right)^{1/4} \frac{1}{\sqrt{\cos\theta}} \dots\dots\dots(14-a)$$

または

$$\delta = R_1 R_e^{-1/2} \left(\frac{A_1}{A_2 A_3^2} \right)^{1/4} \frac{1}{\sqrt{\cos\theta}} \dots\dots\dots(14-b)$$

$$Y = \left(\frac{B_1}{B_2 B_3^2} \right)^{1/4} \frac{1}{\sqrt{\cos\theta}} \dots\dots\dots(15-a)$$

または

$$\varepsilon = R_1 R_e^{-1/2} K^{-1/2} \left(\frac{R_1}{R_2} \right)^{1/2} \left(\frac{B_1}{B_2 B_3^2} \right)^{1/4} \frac{1}{\sqrt{\cos\theta}} \dots\dots(15-b)$$

式(14-a), (15-a)を式(13)に代入し, $R_2/R_1 = (1+\beta)$ に対する K の値 K_o を求める。この K_o を用いて摩擦モーメント係数 C_M がつぎのように求められる。

$$C_M = 6K_o^{3/2} \left(\frac{R_2}{R_1} \right)^{3/2} R_e^{-1/2} = 6K_o^{3/2} (1+\beta)^{3/2} R_e^{-1/2} \dots\dots(16)$$

Fig. 4に K_o の数値計算結果を示す。またFig.5は $C_M R_e^{1/2} (1+\beta)^{-3/2}$ と β の関係である。

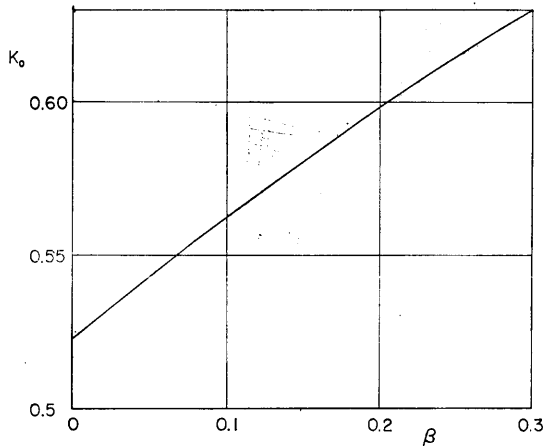


Fig. 4 Relationship between K_o and β .

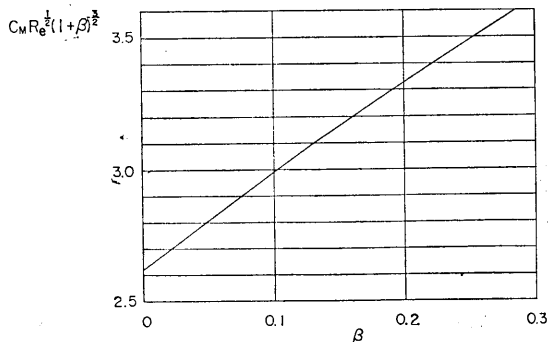


Fig. 5 Relationship between $C_M R_e^{1/2} (1+\beta)^{-3/2}$ and β .

4. 乱流の摩擦モーメント係数

式(8)における $f(\eta)$ および $g(\eta)$ を Daily & Nece²⁾ と同様に $f(\eta) = \eta^{1/7}$, $g(\eta) = \eta^{1/7} (1-\eta)^4$ とおき, 式(8)を式(1), (2), (4), (5)に代入する。せん断応力は1/7乗則で与えられるものと仮定すれば次式で表わすことができる⁽³⁾。

内球側のせん断応力 $\tau_{i\varphi}$, $\tau_{i\theta}$ は

$$\left. \begin{aligned} \tau_{i\varphi} &= 0.0225 \rho \left(\frac{\nu}{\varepsilon}\right)^{\frac{1}{2}} K R_2 \omega \sin \theta \\ &\quad \{K^2 R_2^2 \omega^2 \sin^2 \theta + v_o^2\}^{\frac{3}{8}} \\ \tau_{i\theta} &= 0.0225 \rho \left(\frac{\nu}{\varepsilon}\right)^{\frac{1}{2}} v_o^* \{K^2 R_2^2 \omega^2 \sin^2 \theta + v_o^2\}^{\frac{3}{8}} \end{aligned} \right\} \dots (17-a)$$

外球側のせん断応力 $\tau_{o\varphi}$, $\tau_{o\theta}$,

$$\left. \begin{aligned} \tau_{o\varphi} &= 0.0225 \rho \left(\frac{\nu}{\delta}\right)^{\frac{1}{2}} (1-K) R_2 \omega \\ &\quad \{R_2^2 \omega^2 \sin^2 \theta (1-K)^2 + v_o^2\}^{\frac{3}{8}} \sin \theta \\ \tau_{o\theta} &= 0.0225 \rho \left(\frac{\nu}{\delta}\right)^{\frac{1}{2}} v_o \{R_2^2 \omega^2 \sin^2 \theta (1-K)^2 + v_o^2\}^{\frac{3}{8}} \end{aligned} \right\} \dots (17-b)$$

簡単のため、 δ および ε の θ に関する微分項を無視し、前節と同じ方法によって計算すれば乱流における摩擦モーメント係数として次式を得る。

$$C_M = C_i R_s^{-\frac{1}{2}} (R_2/R_1)^{\frac{2}{5}} = C_i R_s^{-\frac{1}{2}} (1+\beta)^{\frac{2}{5}} \dots \dots \dots (18)$$

ただし C_i は K を含む係数で、 K は R_s によって変化するパラメータである。

5. おわりに

流れ状態のモデルを仮定して摩擦モーメント係数を計算することができた。その結果によれば層流では摩擦モーメント係数 C_M とレイノルズ数 R_s 、半径比 R_2/R_1 の間に

$$C_M \propto (R_2/R_1)^{\frac{2}{5}} R_s^{-\frac{1}{2}}$$

の関係が成立する。

また乱流では

$$C_M \propto (R_2/R_1)^{\frac{2}{5}} R_s^{-\frac{1}{5}}$$

の関係が成立する。

文 献

- (1) 中林, 機講論, No. 740-14 (1974-11), 203.
- (2) Daily, J.W. & Nece, R.E., Trans. ASME, Ser. D, Vol. 82, No. 1 (1960), 217.
- (3) Schlichting, H., Boundary Layer Theory, (1968), 566, McGraw-Hill.